中通島 (長崎県新上五島町

### 【レポート】 計を立てる 一者たち

ライター/Iターン 竹 内

島 は長崎県五島列島が舞台の一つとして登場するが 督による映 0 今年上映され話題を集めた、 北部 に位置するのが新上五島町だ。 画 『沈黙―サイレンス―』。 マーティ 遠藤周; > スコ 作 0 セ その 原作で ツ シ 列

が三万人以上激減。二〇一五年の国勢調査では一万九七一八 業の漁業で大いに栄えた時代もあるが、この半世紀で人口 人にまで落ち込んだ。 つの有人島と六○の無人島で構成される町は、 基幹産

の年から今年四月末までの島内への移住者数は、 八三人(九六世帯)。単純比較はできないもの 他 町は二〇〇五年から移住促進政策に本格的に着手し、 一の自治体と比べても「多くはない数字」 力強さがみられないのが実情だ。 (町総合政策課 0 長崎県内 累計 で

> 章 中通島: 五島列島主要五島の中で北 東端に位置する島。面積168.06km<sup>2</sup>、 人口18,292人(平成29年5月末現在)。

定置網や旋網漁などを主産業に、ツ バキ油や五島手延うどんなどの特産 品がある。橋でつながる頭ヶ島の集 落は世界遺産候補の構成資産の一つ。

あり、 を持っている人など個性あふれる移住者が近年 のライフスタイルを追い求める人、 方で、 島活性化の視点でも期待が寄せられ 全財産四万円で島にやってきた

島には

なかっ 「強っった

た

スキ 傾向に

ル 5

や自

増加

# 五島を「モノづくりの島」に

りに励むお二人を紹介してみたい。

今回はそれら移住者のなかから、

革製品づくりと塩づく

てい

0 L D FELLOW COMPANY代表 / Uターン 高木俊輔さん

### バンドマンから革職

新上五島町・中通島を東西に走る目抜き通り沿 7

持たせるために、

初のうちは接客を中心としていたが、「接客に深みを

革のことをよく知りたい」と革製品を自



ふるさとの新上五島町にUターンし 革職人の高木俊輔さん(36歳)。 売の も話題に上ったの だろう」と島人のあいだで 物」「だれが住んでいるの もないころ。「おしゃれ Uターンした 革製品製造販 二 〇 五 O L D 年の FELLOW が、 萌 島に な建 け 間

れだった。

ドメイド品製作に没頭する日々。「僕のような職人がどん という夢があるんです」と笑顔を向ける。 どん増えて、この島が『モノづくりの街』 COMPANY」代表、 職人の高木さんは、 高木俊輔さんの工房だ。 階の作業場でオリジナル になればいいな、 0

来続けていたバンドが面白くなり、 バイトをしながらのバンドマン生活を送ってい 職人を目指して東京の専門学校に進学した。だが上京以 ップが、新たに革製品専門店を出店することになり、 そんな中、バイト先だった東京・上野にあるセレクトシ 音楽に興味があった高木さんは島の高校を卒業後、 厚かった高木さんが新店舗の店長に抜擢され 専門学校を出た後はア ギタ 信

> らつくり始めたところのめり込んでいき、 のブランドまで立ち上げることに。二十 - 代後半で、 気が付け 革職人 がば自分

ときわ目を引くスカイブル

建物がオープンしたの

れるまでになり、 0) まもなく師と仰ぐ革職 第一歩を踏み出すことになった。 独立を考えるようになったのは当然の 人からも、 その高 13 技 術を認め

### 五島 の環境にチャンスを見出す

の千葉県や埼玉県などを検討したが、家賃負担 独り立ちして工房を構える場所として、 当初 の重さなど は東京近郊

風となり「来島者も増えるのではないか」という期待を持 がネックとなり、 となっており、 折しも新上五島町にある教会が世界遺産 そこで頭に浮かんだのが、ふるさとの新上五 何かと話題を集めていた。 見送らざるを得なかった。 この 候補の構成資産 島 動きが追 町

た。 今後、 地元にUターンする九州 さらに東日本大震災に伴う東京電力の原発事故を機に、 九州がどんどん盛り上がっていきそうな印象も抱 出身者が増えていることを知り、

った。

てくるのでは、と思いました。五島には意外とチャンスが に使ってブランドを立ち上げたら、 「島で革をやっている人もいなかったし、 応援してくれる人も出 五島をアイコン

など。 く稼いでいる格好だ。 商 の比率は、 もので財布類、 あるかもしれない。 業圏人口 高木さんが現在取り扱っている商品は、 カスタムオーダーにも応じている。 [が極端に限られるなか「外貨\_ おおよそ島外が八割、 ベ ルト、 そんな気がしたんです」 カードケー 島内が二割。 ż バ を多 主な ツ ゲ

### 経営改善で事業の継続を

目は売り上げも順調に推移し、 っていた。 島で独立し三年目を迎えたが、 経営も軌道に乗 開業 一、二年

んは、 とりわけ重要になってくるのが販路だ。 離島に限ったことではないが、 運よく勤務していた革製品専門店に販売ル 起業に際 高木さ 1

-を確

では作業風景を公開。

ト上でのライブ配信サ

Ì

・ビス

ツイットキ

ヤスティ

シ

チ

を図ってきたが今後、

さらに多角的にネット戦略を展開し さまざまな手段で顧客にアプロー

ていく構えだ。

保してから独立。 0 などインターネットを活用してきた。若者からの支持が厚 から売り上げが目減りし対応を迫られている。 つながった。 フォ ス マーケティング面では当然、会員制交流サービス(SNS) マ 調な滑り出しを見せたが、三年目となる今年に入って 口 ワー 1 フォン向けの写真共有アプリ「インスタグラム」 が一万一○○○人を突破しているほか、ネッ 商品を一定数卸せたことが安定と安心に

ようだ。

善に向けさまざまな手段を検討。

進むべき道は見えている

経営改

値ごろ感のある商品製作に向けたミシン導入など、

や海外顧客層の取りこみ、

納期短縮に向けた在庫

さらに、これまであまり考えていなか

った取

扱店 Ó 確保、 の拡

充



高木さんが代表を務める革製品製造販売店「OLD FELLOW COMPANY」の外観。



高木さんの手がけた商品。

### 行政からのメッセージ

### ●確かなスキルと人望を持つ期待の若手

一般に、Uターンされた方は地元のことをよく知っていて、 さらに島を出て外の空気を吸ってきたからこそ分かることもあ ると思います。高木さんには、これら両方の視点を、ぜひ島で 生かしていただきたいと考えています。

本年度、高木さんには、島にある長崎県立中五島高校 (新上五 島町宿ノ浦郷)で実施されている「パブリック・ワーク」というカ リキュラムで、「雇用 | をテーマに子どもたちにさまざまな提 言を行うアドバイザーをお願いしています。このカリキュラム は、生徒たちが社会的な問題の解決を目指して、さまざまな人 と協働する取り組みです。

高木さんは、まだ30歳代と若く、高校生からみればお兄さん のような存在。年配の方の話も貴重ではありますが、年齢が近 い高木さんのような方から自らの経験に基づく話を直接聞くこ とができれば、高校生の受け止め方も違うのではないかと期待 を寄せています。

また、高木さんは自分の工房がある敷地を利用してフリーマ ーケットを開いたり、地区の祭りで露店を出したりするなど、 地域活動にも非常に熱心です。

若い移住者同士の横のつながりも広がりをみせていて、活動 も徐々に大きくなっているようです。こういった取り組みは、 役所が手掛けると単なる「仕事」になってしまいがちなので、 今後も、いい意味で周囲を巻き込んでいただければと思います。

革職人である高木さんは、技術を島に持ち帰って独立されま した。島には都会に比べ、ない仕事や店舗もたくさんあるので、 高木さんのように確かなスキルを持った方がどんどん増えて いけば島も豊かになるのではないでしょうか。新たな雇用も生 まれるようであれば、さらに素晴らしいと思います。

若者の流出に歯止めがかからないことを背景に考えると、島 には決して仕事がないわけではありませんが、「ない」という 言われ方をします。これは、つまり需要と供給にミスマッチが 生じているのではないかと思われます。

IT関連企業など、都市部にあるような仕事が島にあれば、 若者も島に残ってくれるのかもしれません。その意味では、ど んな職種や企業が求められているのか町はもっと追求しなけ ればいけないのかもしれませんが、この島はやはり漁業が基幹 産業。海に囲まれているという地理的資源を生かすのが理想と も考えられ、非常に難しいところです。

(長崎県新上五島町総合政策課 移住促進担当 石田卓也)

だっ 'n 島で ŀ. たが イスとし n げ ま 0) で を 起取 は ては 業を考えて n n あ か る 程 6 移住 は 度 攻 順 前 8 調 力 る自 だ 7 強く ・販路や人との 0 Vi 分と か たことも 意 な 同じ 気込 Vi と よう み あ 14 H ŋ 語 · 比較 イプを構 な 的受け 人 貪  $\mathcal{O}$ 欲

> 例 お えば く重 増 ž 革 製 品 を 0 強 業界では、 調 す さ は 商

7 13 が 般 0 お 客

T

なか

な

か

判

别

が

プ

П て、

が

ア

13 プ 自

埋

13 밂

マ

口 信

0)

技 0

0

ク

オ

1)

なス

丰

ル

を持

た

いと厳しいと感じています」はあらかじめ販路や人との縁、コネクションを持っていない。革業界に限った話ではありませんが、やはり起業の際もちろん最低条件。ですが、現実としてそれだけでは難しまっているのが実情です。高い技術を持っていることは、まっているのが実情です。高い技術を持っていることは、

スムーズにまわっていくかもしれない、と高木さんは話す。お互いが納得した上でうまく役割分担ができれば、仕事が既婚者であれば配偶者が営業を担当したり事務を担うなど、時間を割かないといけないケースが多い。このため、もしまた、職人は職業柄、どうしても工房にこもって作業にまた、職人は職業柄、どうしても工房にこもって作業に

# 未来のUターン者の育成を目指して

島の将来を見据えたとき、高木さんは島の子どもたちに 島の将来を見据えたとき、高木さんは島の子どもたちに は、自分が同じ年代の頃に夢中になっていた音楽や本の には、自分が同じ年代の頃に夢中になっていた音楽や本の には、自分が同じ年代の頃に夢中になっていた音楽や本の ことをはじめ、世の中にはいろいろな働き方があることな ど、学校では教えてくれないことを伝えたいと考えている。 「革の仕事も知ってもらったりして、いつかうちに来てほし 期待を寄せている。

います」

が今後、増えてほしいという思いを強くする。が今後、増えてほしいという思いを強くする。

## 塩づくりでスローライフ

五島のうみしお代表/ エターン 小川邦夫さん

## 島で生計を立てるための塩づくり

「島に移住したのは、自然の中でゆったりと暮らしたかっ「島に移住したのは、自然の中でゆったりと暮らしたから。仕事に追われることなく、家族が食べていける分をから。仕事に追われることなく、家族が食べていける分をがら。仕事に追われることなく、家族が食べていける分をがら。仕事に追われることなく、家族が食べていける分をがら。仕事に追かれることなく、家族が食べていける分がいるがは、自然の中でゆったりと暮らしたかって島に移住したのは、自然の中でゆったりと暮らしたかって島に移住したのは、自然の中でゆったりと暮らしたかって



新上五島町に移住し 川邦夫さん (55歳)。

た。 住したのは二〇〇〇年三月 熊本県から新 小川さんが出 妻と三歳の長男を連 三八歳の決断 上五 身地でもある 一島町 だっ に移 n

先輩が空き家を紹介してくれた縁で、 に足を運んだが、 自然豊かな離島の暮らしに以前からあこがれ 小値賀島 がじま 以前から知り合いだった中通島 (長崎県) 年間勤務したあと脱サラ。 で五年間、 大学を卒業後、 をはじめさまざまな島 新上五島町を第二 熊本県庁で一〇 があ の移住 ŋ 民間 屋久 企業 0) 0)

島

上五島町でも塩づくりに乗り出す業者が増えてい 間もないころ。 小川さんが移住した時 日本各地で製塩所を建てる槌音が響き、 期 ば、 塩の専売制度 父が廃. 光止され 新 7

ふるさとに決めた

して「しばらくは需要がありそうだ」「一〇年ぐらいは食 っぱぐれることはないだろう」などと展望を話すのを耳 川さんは移住 前、 中通島の 0) 知人らが塩づくり 市 場 %に関

違って人とのかかわりから生じる無用なストレスもないだ 塩づくり ú 人でもできるようだ。 サラリ マ ン 時

> ろう。 う塩づくりに着手した。 住した翌年 手段と割り 自分には農業や漁業の経験もないし、 切ってやってみるかー もともとは まったく興味がなかった」とい そんな思いから、 生計を立てる

# 情報紙と塩を組み合わせた販路開拓

費に使った。 われるが、 のに一〇〇万円強、 って釜でじっくりと焚き水分を蒸発させ、 部設備を無償で譲ってもらえたことが大きか 開業に要した資金は二〇〇万円ほど。 原料も工程もシンプルなだけに、 川さんの製塩法は、 島の人脈を生かして工費を安くしてもらったり 本来であれば、 海水を焚く釜に約五〇万円、 五島の澄んだ海水が原料。 資金はもっと必要だったと思 逆に奥が 作業小 塩を結晶化させ 、った。 屋を建 あとは 薪を使 てる

はそれほど苦労はしませんでした」と話す。 えていただいたのはそれぐらいでしょうか。 の火加減が大切で、 だが小川さんは「海水を煮詰めて塩を結晶化させるとき もともと物事を学ぶことが好きで、現在も「数学の にハマってしまい、 そこは移住の先輩に聞きましたが、 勉強しているんです」という小川 塩づくり自体 虚

小川さんはマーケティングの面で卓越した手腕

くなかったのかもしれな

さんにとっては、

塩づくりに対するハー

F

ル はそれ

ほど高

者の顔が見えるこ 発揮してい の安全の観点から 起業に際し、 「消費者に生産 食

をつくり、 報紙 な生活をしている とが重要」と認識 生産者である自分 のかを記録した情 島でどのよう 「五島通信



小川さんが働

を目標とはしていない。

量に無料配布した。 に塩とセットで大

1

うように新しい顧客も付いた。 で軌道に乗ったという。 いで一、二回だけ購入しやめていく人もいるが、それを補 そこを起点に、口コミでじわじわと顧客が拡大。 売上高も、 創業から数カ月 付き合

法だと単に店頭販売するよりコアな顧客を獲得できると思 つくることで、 田舎暮らしや食に関心が高い人の心をとらえる情報紙を ファンをつくることができました。 この手

> 小川さんは分析する。 います。 息の長い商売・ 売り方ではないかと思います」と

要となってくるが、 品と言われる。だからこそ、売り方、 リアした格好だ。 海水を原料とする海水塩は、 その問題を手づくり情報紙によってク 他社との差別化が難 客の囲い込み方が重 13 商

## 家族でのんびり仕事をしたい

いが、そもそも小川さんは、 塩づくりは、家内工業的な生産体制で売上高も多くはな お金をたくさんもうけること

食べていけるぐらいを稼ぐギリギリのマーケティングをし が多いのではないでしょうか……。とにかく、忙しくなく 仕事に追われ忙しくバタバタするような生活は望んでいま ていて、それで十分だと考えています」 せん。そもそも離島に移住する人は、そのような考えの方 もっと派手なマーケティングもあるんでしょうが、 私 は

させるための新しい試みにも積極的だ。 とはいえ、現状に甘んじるのではなく、 売り上げを安定

小売店にも商品を卸すようになった。 小売店舗はないが、 従来、ほとんどの商品を島外でさばいてきたため自前の 昨年からわずかではあるが島にある

今冬には、 長崎市と地元・熊本県で、 販促活動の 環と

### 島からのメッセージ

### ●地に足をつけた塩づくりの実践者

初めて小川邦夫さんにお会いしたのは、夫の故・犬 塚虎夫 (虎屋の創業者) が、小川さんに移住祝いとして子 犬をプレゼントしたときだったと思います。あれから、 もう17年のお付き合いとなりました。

当時、私たち夫婦は海塩もつくっていましたが、夫 は小川さんに塩づくりや鳥暮らしなどの面で協力させ ていただきました。夫は小川さんに「いざとなったら、 うちの店で働けばいい と話していたようで、小川さ んは「あのように言ってもらえて、とても心強かった」 と話されていました。

ですが、小川さんも塩づくりできちんと生計を立て ておられ、地に足をつけて頑張っていらっしゃいます。 私などは、もう何も言うことがないです。

小川さんが、熊本県からゆかりのない上五島に小さ なお子さんを連れて移住してくると聞いたときは、本 当に大丈夫かな、結婚もされているけれど奥様はよく 了承されたな、などと思ったりもしましたが、小川さ んが塩づくりを始められたときは「きっと覚悟を決め て島に来られたんだろうから、この島で頑張ってほし い」と応援する気持ちが高まりました。

塩は、生活する上で欠かせないものです。ずいぶん 昔ですが、島ではどの家庭でも塩をつくっていた、と 耳にしたことがあります。塩田などもあったようです。 そのような背景もありますし、島では塩づくりが合っ ていると感じています。

小川さんは、島暮らしの様子を紹介する文章を書い たり、塩などをテーマにした講演会を開いたりして、 五島の良さを伝えてくれています。島の人は、小川さ んの話を聞くことで、視野が広がっているのではない でしょうか。島の住人として、本当にありがたいし、島 に欠かせない素晴らしい方だと思います。

島へ移住される方もいらっしゃいますが、移住者の 方々が交流できるような場がたくさんあればいいなと も思います。みなさんそれぞれ島でやりたいことがあ るのだと思いますし、夢をあきらめないで頑張ってほ しいです。

(五島うどん・海塩の製造販売 虎屋 犬塚益代)

8 話 そ b パ 振 り返 塩 n ン る分野 フ で塩 テー 5 ット  $\overline{O}$ 大 マにした学習会を開 などの 創 釖 素人が ર્ટ 業 してから苦労したことは 魅力を伝えた。 製 おい 作 物。 それと自 車 菛 催 的 な技 前 で簡 面 白 能 単に くてため Þ パ セ . つ ン ッ ス

> が 1

求 ジ

Ł

では

頼

め

Ž

知

n

11

b

41

ませんでした。

現

在

元 来 るだろう 離 たろうが 過島と塩" 本土 くり は 比 相 性 原 が 料となる海水 W 13 イ X 1 なはきれ ジも 後押

うな企 取 頼 販 ・ます」 ŋ 売 Z っまとめ í ま し して 画 全 V) る 般を手掛 7 解 私たち 商 決し 묘 0 ij ってく 0) 口 よう てくれるところがあ ゴ n マ な 1 ク 個 製造を 事 業主 局 支援し 能 0 n 細 本 ば か 0 てく 知 13 二 n なと 合 n 1 る ズ 13 ょ を 13

ろう」と思ってもらえることが大きく、それだけでもなる。

て事業規模を大き「人を大勢雇用しンスはあると強調。

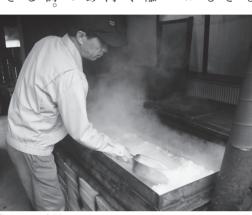
きればいい、という人であれば、やっていけるチャンスはットが生じてしまいそうです。のんびり、家族で仕事がで離島であるがゆえの輸送費の高さや情報格差などのデメリくしようとすれば、

十分あると思いますよ」と呼びかける。

ひとつの仕事に縛られない生き方を

サラリーマンを辞めて良かったとは思うが、

島に来て失



塩をつくる小川さん。

**竹内** 章 (たけうち あきら)

敗した、

ん。とりわけ家族と過ごす時間を持てたことが素晴らしく

と思ったことは一度もないときっぱり語る小川さ

竹内 章 (たけうち あきら) 1974年生まれ、富山県出身。フ リーライター。元中日新聞社記 者。2015年、長崎県五島列島 の新上五島町に地域おこし協 力隊として移住し活動中。

しめたものじゃないですかね?」と破顔する。「子育てに関しては一つも後悔がありません。それだけでも、